

子どもの育ちと保護者支援

— 保育相談からみえる子どもの発達支援と包括的支援 —

Growth of child and Family Support

— Development and integrated care support for children through
nursing consulting work —

白石京子*

Kyoko SHIRAISHI

要旨：近年、離婚等、家庭環境が複雑化する中、園への役割期待が大きくなる一方、これに対応する保育者が苦慮し、余裕を失くしている。

本研究では、園における保育相談の機能を活用した、心理士を含むチーム支援にて、子どもの発達支援、保護者支援、保育者の支援を行った。その結果、子どもの育ちの支援には、環境調整を含む包括的支援が欠かせないことが示唆された。

キーワード：子どもの発達支援、保護者・保育者支援、包括的支援

I. 問題と目的

親の離婚に巻き込まれる未成年の子どもの数は、26万人に達した。家事調停という司法現場で扱う事件でも、子の監護に関する申し立てが2000年以降急増している。家庭不和をきっかけに子どもの養育費が止まり、園の必要経費が払えない等、その内容も多様化している。母子世帯になった理由の構成割合は死別が9.7%、未婚の母等を含む生別89.6%、うち離婚が79.7%を占めている。離婚に至る原因としては、DVが30%、虐待が20%以上という結果（人口動態統計平成23年度）が示されている。このように家庭の課題は、子どもの心身の発達や生活に大きく影響を与えている（湯沢2008）。

他方、家庭環境の変化から園への役割期待が変化している。保育現場は厚生労働省の保育所保育指針（2008）において、保育者が保護者支援に積極的に取り組み、支援の中心的な役割を担っている。

しかし、保育者にとって中心的な業務は子どもの保育であり、複雑な保護者支援をどのように

* しらいし きょうこ 文教大学人間科学部

受け止めていくか、十分に検討されておらず、支援の質に格差がみられる（金谷 2008）。

このように司法現場の事案と保育現場の課題は隣接し、難しいケースが増えている。子どもの最善の利益をふまえた支援には、園に心理士等の職種が加わり、チームで支援することが求められている（松本 2013）。

そこで今回、S 市にある保育園での臨床発達心理士（以下心理士）を含むチーム支援で、子どもの発達支援と保護者支援を行った事例を心理士の観点から検討する。

Ⅱ. 方 法

本事例の相談経緯は、園長からの依頼で対応することとなった。実際の基本的方針としては心理士が保育者とカンファレンスを行い、目標をつくり実践していく。①担任や園長からの話を聞く②子どもの状況把握からのアセスメント、支援目標をつくる③保護者のアセスメント、支援目標をつくる④保育者支援を行う⑤必要に応じ、フィードバックし修正を加え、支援をする。詳しい手順については、表 1、表 2 の通りである。

Ⅲ. 本研究事例

〈事例 1〉

(1) 概 要：対象児：A 児 4 歳 女児 3 人家族（A 児と母親と弟）。1 歳半健診で足の異常指摘あり、両下肢装具使用。初歩 2 歳。斜視傾向。
療育センターに通園し小児神経科受診。

(2) 相談時期：平成 25 年 9 月～現在継続

(3) 主 訴：発達の遅れに伴うコミュニケーションの意欲が低い。

(4) アセスメント

生活習慣・運動：肢体が細く、不器用で動作は鈍い。不注意の怪我が多くボーっとしていることが多い。食生活は貧しく偏食、咀嚼が弱い。虫歯だらけである。手を洗う習慣がなく、風呂には毎日入っていない様子である。

情動・社会性：理解の弱さや経験不足から、単語の羅列での会話が多い。周囲に合わせての行動は難しい。空想の世界で一人遊びが多い。園では、穏やかである。

言語：発音が不明瞭で、友だちとの言葉のやり取りが少ない。

認知：応答性が低く、指示に時間がかかる。絵本の読み聞かせには興味がない。

4 歳児用行動チェックリスト（金谷ら 2014）をみた結果からも、言語・認知（42）、注意・情動コントロール（30）、人と物との関わり（20）、運動スキル（25）に対する数値が高く課題がみられた（図 1 質問項目は 50 項目、5 段階評価）。

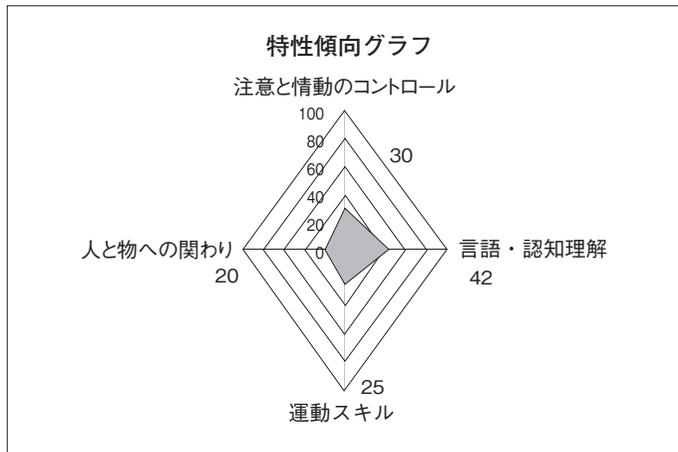


図1 A児4歳児行動チェックリスト（金谷ら2014）

家庭環境：父親の借金で離婚、発達の遅れが疑われる弟と3人暮らし。母親は自分の話に注目してほしいという思いが強く、うつ病での通院歴、ギャンブル依存症がある。家計管理は苦手で、パチンコで使い果たしてしまう。煙草はやめられない。養育態度は一貫性がなく、母親は子どもに振り回されることが多い。父親は離婚後も園の行事の参加をして、子育てに協力しているが、感情の起伏が激しい。母親はいつか子どもに乱暴をするのではないかと心配している。MH式育児態度（広利2003）を用いてみた所、母親は拒否的傾向6点（平均6.51）、厳格・潔癖が4点（平均6.6）、養育の成熟度は10点（平均6.59）、養育不安は12点（平均5.36）と、特に養育不安が高い値であった（図2 質問項目は23項目、3段階評価）。

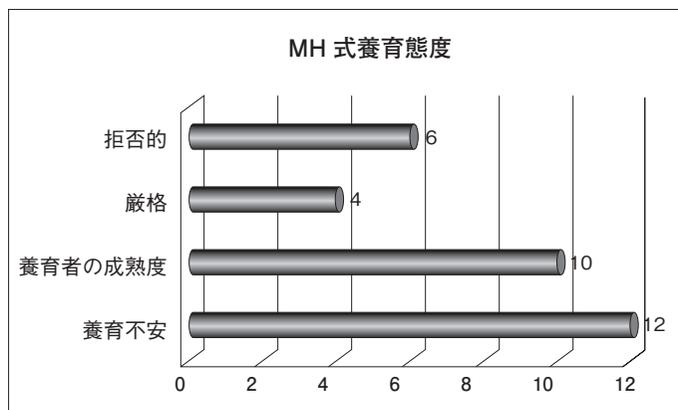


図2 MH式養育態度（広利2003）

(5) 総合所見

A児は知的にも遅れがある可能性が高く、言語や認知が低く、言葉を使ったコミュニケーションを促す必要がある。母親は育児不安の傾向があり、母親の精神的な安定を促進する必要がある。保育者は、母親の態度に対応しきれず、疲労感があった。

○支援計画

A 児の長期目標：保育場面での言葉のコミュニケーションの意欲や表現を促す。

母親の長期目標：母親の育児不安の軽減を促す。子どもとの関わりを促す。

保育者の長期目標：A 児の発達を促すように助言する。母親との関わりを広げる。

(6) 具体的な支援方法と支援経過

第1期「子どもの参加意欲と母親の育児不安」を受け止めて

短期目標：本人のレベルに合わせたコミュニケーションを促す。

方法：動きのまねっこで関わる。

母親の短期目標：育児不安の軽減、母親の精神的な安定を促す。

方法：子どもへの声かけの工夫をする。育児についての話し合いをする。

保育者の短期目標：保育者の疲労感の軽減を図る。

方法：A 児の遊びの充実を促す。母親への提出物の伝え方を考える。

子どもの状況：園を休みがち。朝、母親と別れる時に泣くが、「ママがAちゃんの友だちと遊ぼうかな」というと、「Aの友だちだから、ダメ」と答える等、集団生活にはなれてきている。家では父親の顔色を見てびくびくしている。兄弟げんかでは、乱暴。注意しても母親には横柄な態度をとるといふ。

母の状況：母親の第一声は、この子は育てにくく、イライラするという。足の発達の遅れが不憫で子どもを甘やかしてしまったという。買い物では、子どもの要求が激しく、泣き叫ぶA児に対応できずにいる。母親の生育歴は、祖母が6歳の時死亡、祖父のパチンコの借金で放浪生活をしてきており、家庭への憧れが強いことがわかった。母親は地域で孤立しがちで、相談する人がいない。

保育者の状況：A児は大人しいが、時々何処かにいってしまうので困る。担任は母親の提出物の遅れ等が多く、その対応に疲労感があると述べた。

支援：まずは、母親の精神的な安定を主眼にチームで支援を行うこととなった。心理士の役割としては母親の気持ちの安定を図り、継続して支援していくこととした。チームでも母親の不安を十分聞き、母親の混乱した気持ちの受け皿になり、親子で毎日をのびのびと過ごす工夫を伝え、課題整理に付き合う。保育者には、本人のできるレベルに合わせた言葉での会話を促し、動きのまねっこで共有体験することを伝えた。

第2期「子どもの育ちへの理解と母親の安定」

A 児の短期目標：本人のレベルに合わせたコミュニケーションの手段を促す。

方法：手遊びで友だちと関わる、コミュニケーションを促す。

母親の短期目標：育児不安の軽減、母親の精神的な安定を促す。

方法：子どもとの対応を助言する。

保育士の短期目標：保育者の疲労感の軽減を図る。

方法：A 児との関わりの充実、母親との対応の工夫をする。

子どもの状況：母親から「Aちゃん」と声かけすると、母親に手を振る等、親子の関わりがみられてきた。運動会では最後まで参加することができ、達成感を体験、クラスの中の一員

としての参加意識がみられた。

母親の状況：子どもの良い所に目を向ける方向で育児を考えるようになった。又、家庭のことを話すようになった。

保育者の状況：A児が落ち着いて聞ける環境を整え、忘れ物が無いように、持ち物のマーク・シール等の工夫を行うようになった。

支援：母親の混乱した気持ちを整理するとA児や弟の発達の不安、夫婦の課題、母親の病気の心配があることがわかった。子どもの発達の見立ての理解、夫婦の課題は十分受け止めた後、地域相談機関の情報を伝え、母親の病気については、保健センター、自助グループを紹介した。

保育者は、A児の対応を心理士と一緒に考え①集団での楽しさを体験させ②本人のできるレベルに合わせる③居場所をわかりやすくする工夫をする。さらに、保護者には、A児が母親に注目してもらいたい可能性があることを伝えた。

第3期「親子の関係の安定」に向けて

A児の短期目標：本人のレベルに合わせた言葉媒介のコミュニケーションの促しをする。

方法：かくし絵、絵本等を媒介として関わる楽しさを体験する。

母親の短期目標：育児不安の軽減、母親の精神的な安定を促す。

方法：子どもへの声かけ、生活習慣や買い物場面での対応の助言をする。

保育者の短期目標：保育者の疲労感の軽減を図る。

方法：A児との関わりの充実、保護者への声かけ、対応の工夫をする。

子どもの状況：子どもは、集団の遊びに参加、友だちと関わる意欲がみられ出した。絵本に対しては時々、興味をもって立ち止まることもある。

母親の状況：母親は回数を重ねることで、育児不安の気持ちが整理でき、家庭での子どもの様子、子どもとのやり取りを伝えてくれるようになった。又、母親は地域での生活に慣れてきた。

保育者の状況：保育者は、A児の母親のいくつもの嘘に落胆していた。母親の精神的な揺れ幅を伝え、どう応援していくかを一緒に考えることとした。

支援：チーム援助によるA児の支援は、言葉を使ったコミュニケーションの楽しさを中心に①かくし絵を活用する②子どもの好きな物や日常的なことが出てくる絵本を選ぶ③絵や1語文が多い絵本を与えてみる④繰り返しを楽しむ絵本を探す⑤ペープサートや歌の活用をする。

母親には、①発信した単語に1語つけ足して返してあげる②すぐ、親が察して、やってあげるのではなく、言葉かけや子どもの意思の確認を促す。③子どもの要求時の「かんしゃく」に過敏反応せず、音声や言葉で伝えた時に応答する方法を伝えた。又、安定した親子の関係の構築の大切さも助言した。

保育者には、①孤立しがちな保護者には、その人の対人パターンをとらえながら、温かに接することの大切さを助言した。今後の支援に向けては、医療や福祉との連携を念頭においたA児親子の支援体制として、園長、副園長、担任、保健センター、を含めた会議の開催が実施される運びとなった。

表1 A児の支援（各自、自己評価）

A児

長期目標：コミュニケーション意欲を育てる

形態：①集団指導②一斉での個別③個別指導

目標		内 容	形 態	保育者評価	心理士評価
Ⅰ期.	子ども	コミュニケーションの促し	①②③	○	○
	母親	動きのまねっこで関わる	①②③	○	△
		子との関わり育児不安の軽減	③	○	○
保育者	子どもへの声かけ・対応	③	○	○	
	疲労感の軽減	①②③	○	○	
		子との遊びの充実	①②③	○	○
Ⅱ期.	子ども	コミュニケーションの促し	①②③	○	○
	母親	手遊びで関わる	①③②	○	○
		育児不安の軽減	③	○	○
		子ども対応	③	○	○
	保育者	(養育費) 調停のしくみ	③	○	○
		疲労感の軽減	③	◎	○
遊びのやり取り充実		①②③	○	○	
		チーム援助	①②③	○	○
Ⅲ期.	子ども	言葉媒介のコミュニケーションの促し	①②③	◎	◎
	母親	絵本を媒介に関わる	①②③	○	△
		育児不安の軽減	③	◎	◎
	保育者	子ども対応・生活習慣で	③	○	△
		疲労感の軽減	③	○	○
		保護者の特性理解	①③	○	○
園全体	チーム援助体制	①②③	○	○	

3段階◎よくできた○出来た△もう少し

〈事例2〉

(1) 概 要：対象児：B児5歳 男児 2人家族（母親とB児）出産時から問題はないが、弱視あり。家庭不和から転居、途中入園。

(2) 相談時期：平成25年9月～現在継続

(3) 主 訴：弱視（左目）、集団遊びの参加意欲が低い。

(4) アセスメント

運動・生活習慣：B児は大柄、生活習慣は順調、左目の弱視。大変神経質で、首がびくびくすることがある。

情動・社会性：強いこだわりがあり、切り替えに時間がかかる。大きな音や刺激に反応しがち。乱暴な子との関わりは苦手である。

言語および認知：言葉の遅れはない。いつもと違うルールや予期しないことには混乱しがち、集団生活の妨げになることもある。図鑑や数字は好きで没頭する。5歳児用行動チェックリスト（金谷ら2014）の結果では、注意・情動コントロール（36）や人と物との関わり（30）に対する数値が高く、課題がみられた（図3 質問項目は50項目、5段階評価）。

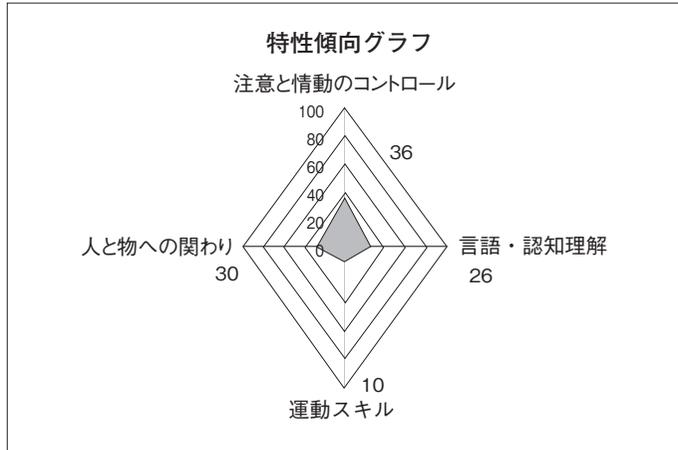


図3 B児5歳児行動チェックリスト (金谷ら 2014)

家庭環境：夫婦の別居からこの地域に転居してきた日常生活の変化があり、子どもが園の生活に適応しているか過敏に反応しがち。B児が「保育園」に行きたくないと訴え、クラスに「いじめ」があるのではないかと園に不信感をもっている。母親は大変神経質で地域で孤立しがち。子どもの朝の支度はゆっくりで、B児にイライラして、泣かせてしまうという。MH式育児態度 (広利 2003) を用いてみた所、拒否的傾向が6点 (平均 6.51)、厳格・潔癖が6.5点 (平均 6.6)、養育不安は8.5点、(平均 5.36)、特に、養育の成熟度は11点 (平均 6.59) で高い値であった (図4 質問項目は23項目、3段階評価)。

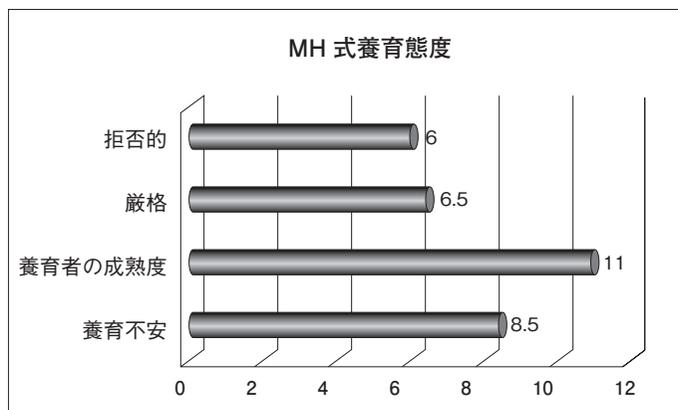


図4 MH式養育態度 (広利 2003)

(5) 総合所見

B児の弱視 (左目)、視野の狭さ、こだわりや集団への参加にどう影響しているのだろうか。子どもの遊びのルール理解を促し、友だちとのやり取り友だちとの関わりを促進させる環境設定が必要である。母親は家庭生活の立て直しに自信を失くし、母親の精神的な安定を促す必要がある。保育者も母親のイライラ感に巻き込まれそうであった。

具体的な支援計画

B児の長期目標：友だちとの関わりを促進させ、集団遊びのルールを理解させる。

母親の長期目標：生活不安の軽減、子どもとの関わり回復を促す。

保育者の長期目標：疲労感の軽減を図り、母親との対応力をつける。

(6) 具体的な支援方法と支援経過

第1期 「子どもの関わりと母親の精神的な安定」

B児の短期目標：遊びでの楽しさの体験、他児との関わりを促進させる。

方法：小集団での運動遊びを行う。

母親の短期目標：母親の生活不安を軽減する。子どもとの関わりを促す。

方法：子どもへの声かけや関わり方の工夫を助言する。

保育者の短期目標：保育者の疲労の軽減を図る。

方法：B児との関わりの充実、子どもの様子を伝え安心してもらう。

子どもの状況：B児は乱暴な男の子とのやり取りは苦手で逃げ回る。積極的には自分からは関わらない。大人の顔色を見る所がある。

母の状況：乱暴な男の子とのやり取りを「いじめ」なのではないか、B児が前の園を恋しがっているのではないかと心配している。母親はB児のペースの遅さに手をだしてしまう。

保育者の状況：親子の園に慣れない不安を受け止めているが、母親のイライラした言動に緊張している。

支援：母親は、園が安定した居場所になることが最優先である。家庭環境が不安定な状況であること、過敏な保護者であることから、臨床発達心理士は保育者のコンサルテーションを中心としたチーム援助体制とした。

具体的には、①目でわかる手がかりを取り入れる ②子どもの出来ない部分を保育者がサポートする③上手く出来た時には、褒める。④園では「早くしなさい」、「遅れるよ」といった叱責や否定的な言葉は避け、安定した関係の維持を心がける。

第2期 「子どもの育ちへの理解と母親の安定」

B児の短期目標：他児との関わり、遊び場面でのルール理解の促進を促す。

方法：じゃんけん遊びでルールを理解する。

母親の短期目標：母親の生活不安の軽減。子どもとの関わりを促す。

方法：B児の「朝の準備」での関わり方の工夫を促す。

保育者の短期目標：保育者の疲労感の軽減を図る。

方法：B児との関わりの充実、子どもの様子を伝え安心してもらう。

子どもの状況：園にも慣れ、担任の声かけに応答し、集団での運動遊びで元気に動く姿がみられるようになった。

母の状況：母親の不安は、B児の発達の不安、家庭不和であることが語られた。

保育者の状況：保育者は、母親の子育てを応援し、母親の不安を十分聞くことを心がけた。「前の園が好きなのは大事なことで、この園も好きになってもらえるように皆で協力していきましょう」と母親に毅然とした態度で伝えた所、母親からの理解が得られた。

支援：コンサルテーションで子どもの支援には①視覚的にわかる絵カードを採用する。②「短く・穏やかに・肯定的に」言葉かけの工夫をする。母親の不安に対しては③母親が家庭で親子の関わりで出来たことはフィードバックして褒め、次の取り組みにつなげていく。④家庭不和の課題は地域の相談機関に相談することとなった。

第3期 「親子の関係の安定と新たな門出」に向けて

B児の短期目標：集団との関わり、遊び場面でのルールを理解を促進する。

方法：鬼ごっこのルールを理解させ、友だちとやり取りをできるようにする。

母親の短期目標：母親の生活不安の軽減を図る。子どもとの関わりを促す。

方法：子どもの「場面の切り替え」での工夫を助言する。

保育者の短期目標：保育者の疲労感の軽減を図る。

方法：B児との関わりでの充実、保護者との関係を維持する。

子どもの状況：家庭生活のリズムが整い、親子の遊びが増えたという。園でのじゃんけん遊びや鬼ごっこでも、苦手な乱暴な子どもとやり取りがうまれた。

母の状況：母親は再就職が決まり、前向きな姿勢がみえた。そのことは支援と共に親子関係や担任との関係にも良い影響を与えることとなった。

保育者の状況：子どもとの遊びを深め、母親との関係を維持するよう心がける。

支援：コンサルテーションでは、①遊びを始める前に、ルールをイラストで示す。②スモールステップで、個別から小集団、集団と遊びを広げ、ルール理解の幅を広げていく。母親には、③母親の頑張りで乗り切ったことを労い、親子のふれあいを応援する④保育者には、B児とのふれあいを十分すること。

B児は体を使っての運動の楽しさを体験し、他児と関わる意欲がみられた。保育者は、出来るだけB児の園での様子を伝え、母親と話し合うことで親子が安堵していき、保育者もB児親子とのコミュニケーションに意欲的になった。

表2 B児の支援（各自、自己評価）

B児

長期目標：集団遊びのルール理解を育てる

形態：①集団指導②一斉での個別③個別指導

目標		内 容	形 態	保育者評価	心理士評価
I期.	子ども	他児との関わりの促進	①②③	○	○
		集団での運動遊び	①②③	◎	◎
	母親 (コンサルテーション) 保育者	生活不安の軽減・関わり	③	○	○
		子どもへの声かけ・助言	③	○	○
		疲労感の軽減	①②③	○	○
	園の様子を伝える	①②③	○	○	
II期.	子ども	他児と関わる意欲	①②③	◎	◎
		じゃんけんゲームの理解	①③②	○	△
	母親 (コンサルテーション) (コンサルテーション) 保育者	生活不安の軽減・関わり	③	◎	◎
		子ども対応・朝の準備で	③	○	○
		(婚姻費用) 調停しくみ	③	◎	◎
		疲労感の軽減	③	◎	○
		子どもとの遊び・母親へのねぎらい	①②③	○	○
	チーム援助	①②③	○	○	
III期.	子ども	集団で関わる意欲	①②③	◎	◎
		鬼ごっこゲームの理解	①②③	◎	◎
	母親 (コンサルテーション) (コンサルテーション) 保育者	生活不安の軽減・関わり	③	◎	◎
		子ども対応・場面の切り替えて	③	○	△
		(離婚) 調停しくみ	③	○	○
		疲労感の軽減	①③	○	○
	保護者との関係維持	①②③	○	○	

3段階◎よくできた○出来た△もう少し

IV. 今回のケースの考察

A児は全体的な遅れが見られたが、本人が「楽しい」と思える経験を積み重ね、コミュニケーション意欲がうまれつつある。対象児の得意なことを探し、子どもの興味や好きなものを活用し、狭い意味での言語にこだわらない支援を心がけた支援により、早期介入が行えることとなった。母親の精神的な不安定さの背景には、慣れない地域での孤立しがちな暮らしや子どもの発達、夫婦の課題、そして母親自身の病気等、複合的に重なった悩みがあった。支援では母親の気持ちにできるだけ寄り添うことで、自分の生育歴・心の叫びを述べるようになった。その後、母親は地域の資源である、子どもの療育、母親の医療機関、司法の相談機関に足を運ぶことになった。チーム援助体制を整えたことで保育者は、疲労感が軽減し、子どもの育ちに関わる原動力につながったという。支援者達がネットワークを持ち、連携をとりながら知恵を出し合うことが大きな力になる。今後も継続して支援していく予定である。

B児は、視野の狭さ、こだわりがあり、友だちとのやり取りの力の弱さが影響していたが、環境設定を含めた支援で、他児と関わる意欲がうまれた。人と関わるのは楽しいことであり、本人が「楽しい」と思える経験から学ぶことが大切である。保護者は保育者との会話から子どもの特性を理解していった。家庭問題では地域の専門機関とつながり、新たな門出に至った。そのプロセスを経て親子関係は安定していった。母親は家庭不和で精神的な不安定さを保育者に向けてい

たが、その後関係調整を行うことができた。

どちらの母親も、子育て不安から、積極的に地域資源を活用することとなった。本地域の療育や医療の専門機関に心理士がいたことは、情報交換が円滑にすすみ、地域連携につながりやすかった。さらに、今回の論文の中では詳しく触れていないが、心理士は離婚が及ぼす子どもの忠誠葛藤心についての説明を加えた。子どもは親の葛藤に直面すると、大人の想像を超えた幼気な気遣いを示す。保育者には、子どもとの十分なスキンシップが大きな意味を持つこと、園での安定した関係性が重要であることを伝えた。

V. まとめ

保護者の家庭環境が複雑化する中、園には子どもが示す発達特性を理解する難しさを感じる保護者、多岐にわたる家庭の課題を抱えた保護者、子どもの育ちに「不安感」や「困り感」がある保護者がおり、園への期待が大きくなる一方、その対応に保育者は苦慮し、余裕を失くしていた。

本研究は、まさに子どもの発達の課題と保護者の課題が重複する事例で、保育相談の機能を活用した、心理士を含むチーム支援で検討した結果、以下のことが明らかになった。

園での保育相談支援は、①身近で相談しやすいこと、②気になる子の初期支援の場になること、③子どもの支援が継続的に出来ること、④家庭の課題も含めた親子関係の調整もできることが求められる。そのためには保育者との協働は欠かせない。

そのことを踏まえ心理士は、⑤子どもの発達の見通しを示し、具体的な方法を保育者と協働すること、⑥保護者の気持ちを受け止め、気づきを支え、関係調整すること、⑦必要に応じた地域資源情報を提供すること、⑧保育者支援を行うことが期待される。今回の支援では、行動チェックリスト（金谷ら 2014）を使用し、子どもの特徴や困難さを可視化することで、具体的な方策につながり、子どもの発達、保護者支援に効果がみられた。保育者からは、負担軽減が報告された。

このように子どもの育ちの支援には、環境調整を含めた包括的支援が重要であることが示唆された。

今後さらに、一人ひとりの子どもや家庭の特性を把握し、医療・福祉・司法を視野に入れた包括的支援の実践、研究をしていくことを課題としたい。（なお、本論文は、本人が特定できないように配慮されている。）

参考文献

- 厚生労働省大臣官房統計情報部 「人口動態統計 H23 年」(2013) 厚生労働統計協会
- 湯沢雍彦 (2008)「データで読む家族問題」NHK ブックス
- 厚生労働省編 (2008) 「保育所保育指針解説書」ひかりのくに
- 松本伊知朗 (2013)「子ども虐待と家族」明石書店
- 金谷京子・坪井敏純・吉田ゆり (2004)「子育て支援ニーズからみた保育士の役割と保育士養成」保育士養成研究
- 金谷京子・澤江幸則・森正樹・藤井和江・根岸由紀・白石京子 (2014)「保育巡回相談ガイドラインⅥ」日本
- 広利吉治 (2003)「養育態度と子どもの集団における状態との関連性について」日本教育心理学会総会論文集
(45) 発達心理学会 第 25 回発表予定
- 本郷一夫 金谷京子 編著 (2011)「臨床発達心理学の基礎」ミネルヴァ書房
- 柏女霊峰・橋本真紀 (2008)「保育者の保護者支援」フレーベル館
- 石川洋子 (2007)「子育て支援におけるカウンセリングニーズー埼玉県内の保育所を対象とした調査からー」
日本保育学会

謝 辞

本研究のきっかけを与えて下さった文教大学人間科学部櫻井慶一先生、大塚明子先生、実際の事例研究に協力して下さった S 市の保育園の皆様方には、厚くお礼申し上げます。